

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

# ホワイトプリズン

聖女王は深い闇の淵に微睡む

小説 黄 支 亮

挿絵 カワギシケイタロウ

第〇章 .. 冥府

006

第一章 .. 紛糾

022

第二章 .. 潰走

052

第三章 .. 姦計

104

第四章 .. 拷問

139

第五章 .. 疑念

177

第六章 .. 真相

218

∞ .. エピローグ

248

## 登場人物紹介

Characters



### ニーナ

聖母騎士団団長。大剣を用いる赤毛の女丈夫。勇敢な指揮官。

### サラ

白巫の聖教団を束ねる神官長。知恵に優れた冷静な女性。

### シルビア

聖王国の王立魔法学校の校長。女王の義弟カレスの恋人。

### エマ

聖王国の女王。黒い怪異に誘拐される。

### カレス

女王エマの義弟にして摂政公。王国屈指の魔術師。

### ビアン

聖王国の内務卿。姦悪な老人。

### ロッシ

聖王国の国軍将軍。

### 黒い怪異

聖王国にあるべからざる存在。女王をさらった張本人であるが、出所来歴その他全てが不明。

「……もう、もう駄目、私も……私も……」

女神官は、一度目を閉じると喘ぎ続けた。

「私も、私も犯して欲しい……」

竜の猫の目がわずかに細くなったようであった。それからすぐに女の肛門から舌が引き抜かれる。直腸で吸収しきれなかった毒液が、堰を切ったように噴出する。

「ん、んああ、んああっ」

サラの締まった肛門から、水鉄砲のように毒液が噴き出す。毒液だけではない。女は毒液とともに肛門から大量の大便も吐き出していた。

ブブブッ。

凄まじい音を立てて、女の肛門から汚物が噴出する。神官は白目を剥いて体を小刻みに痙攣させた。

「サ、サラ……」

シルビアが体を硬くして呟いた。

あまりにも無残で激しい拷問。唯一竜による責めを受けていないシルビアは、恐怖やおぞましさを感じるあまり、頭の中が真っ白になっている。

「う、うう……」

神官は仲間達の眼前で脱糞を続けていた。とどめようにもとどめることができないのである。

「み、見ないで、見ないでください……」

女は排泄の快感と、全裸で脱糞を強制される瞬間を人に見られるという苦痛から顔を歪めた。そして怪物は本格的に神官の身体を責め立て始める。先ほど女戦士を髑り、陥落せしめた八本の生殖器が、女神官の火照りきった身体に殺到した。二本の生殖器が神官の重そうに垂れた乳房にまわりつく。毒液に先端を侵されたサラの乳房は、あつという間に怪物の管状の器官に巻きつかれ妙な具合に歪んだ。乳房の先端の硬くしこったサクランボの実は天井を指して屹立する。

「ああ、胸をそんなに……」

誰にも触れられたことのない乳房、誰にも吸われたことのない乳首が、たった今、汚されようとしていた。乳房に加えられる激しいバイブレーションに、サラは息も絶え絶えである。竜の責めは時間を追うに従いエスカレートしていく。乳房を過酷に苛める二本の生殖器とは別の生殖器官が二本、サラの細い足首に絡みついたかと思うと、女の両足を左右

に大きく広げた。宙づりにされた神官は両手を大きく広げ、両腿をV字に開かされてしまった。聖王国の神官の感じやすい花卉が仲間達の目の前に露出され、神官はこのうえない辱めに顔を真っ赤にした。

「こんなところを……」

神官は秘肉を隠そうと内股に力を入れて突っ張ろうとしたが、毒のまわった身体は、全く主の思い通りにならなかった。

「いや、駄目っ駄目っ……」

「サラ……」

ニーナが涙の溜った眼差しを友人に送る。

「サラ……」

シルビアも友人の理性が破壊されるさまをなす術なく見つめている。

と、仲間達の目に、いきり立った怪物のペニスがわさわさと蠢く姿が見えた。生殖器はサラの中に入ろうとしていた。少女のように薄い神官の恥毛の下にある女貝は、これまでの激しい責め苦のせいで膨れ上がり充分な湿りを見せていた。そして後はくわえ込むものが入り込んでくるのを待つだけとなっていたサラの肉壁の内に、四本の竜のペニスが殺到

した。まず二本の生殖器官が女の褰に取りつくと、クレヴァスの奥にある子宮を観客達に開帳するように押し広げた。

「……」

観客であるシルビアもニーナも、はしたない格好にされた神官長の股間に視線が釘付けになっている。そして、女達の見ている前でもう一本のペニス尿道のすぐそばにある肉真珠に取りつき、これをぐりぐりと刺激し始めた。快樂のボタンに強烈な刺激をもらった女神官は日頃人々を教化するために用いられる喉と唇から牝の泣き声を漏らした。

「ああ、駄目、駄目。そんなところを弄られると、ああ……」

女は目を潤ませながら、うわごとを口走る。竜は女の抗議が言葉以上でも言葉以下でもないのを知っているのか、褰が重なり合うところに隠れた小さな肉真珠を激しく擦り上げそして揉みしだく。クリトリスを丹念に刺激されたサラの小さな二枚貝の奥からは、糸を引く透明な女蜜がどくどくと溢れ続ける。牝汁は、びらびらとだらしなく開いた女の肉褰を伝わり、先ほど毒液とともに大量の大便を大噴射させた肛門にまで伝わっていく。

「くっ、そんなところを……ああ、ああ……」

サラは上唇をなめるようなしぐさを見せた。女の身体は精神の頑迷さとは反比例するよ

うにして実に柔軟に初めての快楽を受け入れようとしていた。女神官は、自分がこれから受ける刑罰が彼女の身体にどれほど心地よいものかということを知っていた。素晴らしい美酒。飲めば楽園にまで到達する天上の悦び。法悦。友人の女騎士ですら誇りを忘れ、淫売のようによがり狂ったほどなのである。

——私も……。

神官は自分の心の奥底に潜んでいた竜の妻とも言うべき淫らなものが目覚めるのをはつきりと感じていた。そして覚めたが最後、サラはこの欲望という化け物に呑み込まれてしまうことになるのだ。

——すべてを受け入れてしまいたい。そうすれば……。

女は自分一人であれば欲望を孵化させることはなかったし、できなかったろう。神殿の戒律は厳しく、そしてそれ以上に神官長自身の自律心は強固であった。だが、四枚の翼を持つ竜は、彼女の欲望を眠らせておくようなことはなかった。

「う、うああっ」

竜の生殖器の最後の一本がサラの股間に近付く。

小ぶりの、しかし刺激のせいでよく膨らんだ女の花弁の真ん中の裂け目を、黒い竜のペ



ニスが確かめるようにぐりぐりと刺激する。透明な粘液で大いに濡れた女のクレヴァスは、竜の細めの生殖器官の侵入を拒むことすらなかった。竜のペニスは一瞬硬く収縮すると、サラの花弁にごくごく自然に入り込んだ。

「か、かはあっ！」

女の額から汗が飛び、鮮血が二筋、深い裂け目から愛液に混ざって流れ出てくる。

「んああーっ」

サラはニーナとは違い、最初から膣内に痛みを感じることにすらなかった。肛門から吸収された毒液のせいであろう。十分に薬が効き、仲間が犯される光景を見せつけられたことで異様に興奮していたサラは、初めて股間に異物を突き立てられたその瞬間から激しい快感の渦に呑み込まれていた。

「あっ、あっ、あっ……」

硬く目を閉じたサラの表情には苦悶の色があった。苦痛ではない。こんな状況で自分が女の悦びを感じていることを仲間知られるのを隠そうとする苦悩である。

「サ、サラ……」

シルビアもニーナも、サラのV字に広げられた両足の奥で展開される光景に息を呑んで

いた。もつとも、仲間が陵辱される姿を見る二人の女の感じたものは相当違っていた。シ  
ルビアのそれは恐怖と不安であり、そしてニーナのほうは恥じらいと共感であった。

—— あれは、本当に気持ちいい。頭がおかしくなるぐらい……。

仲間が犯される姿を自分にだぶらせ、女騎士は再び子宮が熱くなるのを感じていた。

「んんっ、んんっ、んんっ」

竜のサラへの刑罰はなおも続いていた。竜のペニスは、サラの女陰にずっぽりと埋め込まれ、女の膣内を旋回し、激しいピストン運動を繰り返していた。牝汁はほとんど洪水のようにしてサラの秘所を濡らし、竜のペニスを伝い、廃坑の地面まで垂れていた。残酷な刑罰を受ける女神官の表情にはすでに苦悶の色はない。女神官は全身に愛撫を受け、串刺しにされる悦楽を貪る牝犬と成り果てていた。

「ああ、はああ、はああ……」

女の精神も肉体も抵抗を止めていた。

「ああ、ああん、はあ」

友人達の目があることは神官も覚えている。けれど、そのことは問題ではなかった。むしろ、他人の目が彼女の快楽をよりいっそう強烈な快楽へと誘うことになったのだから。



「あ、あ、あ……」

牝の歡喜の聲が、坑道一杯に響き渡る。サラは、ゆっくりと頂点に上りつめていく。竜のペニスは女の股間をなおもえぐり続ける。淫らな液体が、ぴちゃぴちゃと音を立てて飛び散る。

「あつ、あつ、あつ、あつ……あーっ！」

女の一際長い悲鳴があった。それが、女神官の頂上であり最後であった。

白目を剥いて気を失った神官の身体が地面に降ろされ、そして、最後の生贄の処刑が始まることになった。

「シルビア……」

ニーナは仲間に声をかけたが、毒が効いているうえに、激しいセックスを強いられ消耗しきった女戦士には仲間を助ける余力など最初からなかった。

「ああーっ」

最後の美しい獲物もすでにしゃぶりつくされた他の獲物と同様に、実にあっけなく怪物に捕らえられることになった。

竜はシルビアの踝を掴むと有無を言わずに脚を上にして逆さに宙に吊り上げた。

「ああ、いや、いや、は、恥ずかしい……」

シルビアの肉の裂け目は、竜の金色のすぐ目の前に広げられた。シルビアのピンク色をした二枚貝も、他の二人同様に毒を受けて、愛撫の必要がないぐらいに湿りきっていた。

「ああ……」

女は溜め息を漏らした。怪物のほうはといえば、最後の生贄だからといって手抜きをするつもりは全くないようであった。二人の女を悶絶させた生殖器が、色白の魔術師の肌にとわりつく。

「ああ、駄目……」

と、シルビアの見ている前で、竜は、これまでに見せたことのない動作を見せた。竜のペニスが二本ぐるぐると絡み合ったのである。

「な、何をするのっ！」

シルビアは息を呑んだ。

「ま、まさか……」

竜は二倍の太さになったペニスをシルビアの大きく開いた股間にいきなりあてがった。

「あっ、ああーっ」

——二人とも起きてこないで。

ニーナは祈るように呟いた。

女の蜜壺が泉の中で震える。群れからはぐれたうなぎの一匹が、女の蜜の匂いに反応して、ゆるゆるとニーナの剛い茂みのほうへと泳ぎよる。ニーナの恥ずかしい肉褌は、すでに内側から溢れ出す淫汗によって充分すぎるほどに濡れていた。白いうなぎはニーナの股間のまわりを泳ぎまわっていたが、やがて、入るべき二枚貝を見つけて、そこにまわりつき始める。水の中で華開いた女の黒い茂みの中にうなぎは頭を押し込める。

「うっ……」

ニーナは自分の腕を噛んで、声を押し殺した。

——こんなところを、他の二人に見せられない。

魚責めはニーナの恥肉にとつて、非常に甘美な経験であつた。

——もう一度、ゆつくりと味わってみたい……。

サラヤシルビア同様に、ニーナもすでに肉欲の虜になっていた。

——泉の浅いところであれば、溺れる心配もないだろうし、群がるうなぎの数も少ないから、十分に快感を堪能できるのではないか。



女は、そのような恥知らずな目算を頭の中でたてていた。実は騎士団長が水辺での休息を主張したのも、そこが適當だったからではなく、いま一度破廉恥な遊技にふけりたいという強烈な欲望があったからである。

水の中で犬のように四つん這いになった赤毛の美女は、うなぎが入りやすいように自分の指で肉襷を押し広げていた。うなぎは本能に従って、女の中に入り込んでいく。

——くううっ。入ってきた……。

女は口を大きく開け、叫ぶような素振りを見せた。女は現実には魚に入り込まれる悦びが、自分の淫らな計算以上のものであったのに、もう少しで歓喜の声を上げそうになった。だが、女には実際に、叫ぶことは許されなかった。女は異物が膣の中に入り込んできて暴れ回る悦びにも沈黙を守り続けなければならなかった。

——あ、あ、あ……。

女は目を閉じた。水面下では、魚が左右に尾を振って激しく動き回る。女の豊満な臀が小刻みに震え、泉の上に小さな波が湧き立つ。

「くっ……」

花卉の奥深くに入り込んだうなぎが強烈な旋回運動を見せたのに、ニーナはたまらず悶



絶の喘ぎを小さく漏らした。仲間達に隠れて、自ら獣の前に秘肉を広げるといふ破廉恥な行為が、女の悦びをよりいっそう痛烈なものとしていた。

——こんなところを見られたら……。こんなところを見られたら……。

女は自分の背後を振り返った。犬のように四肢をついた豊満な美女の臀の割れ目から、白く長いなぎが尻尾のように生えているのが、女騎士にも見えた。

——体が熱い。あそこを弄って、汁をたくさん出さないと、熱さで体が燃え上がってしま……。まう……。

ぎりぎりのきわどい快楽にニーナは酔いしれていた。  
と。

女騎士の恐れていたことが起こってしまった。

「二、ニーナ？」

女騎士の不在に気がついたシルビアが、泉のほうにやってきたのである。股間にうなぎを埋め込んだ騎士は、魔法使いの呼びかけにすぐに反応することができなかった。

「み、見ないで……」

女は恥じらいに顔を火照らせ、四つん這いのままに言った。しかし恥じらいながらも、

膣の中で激しく暴れるうなぎを抜こうとはしなかった。

「ああ、夜半に、あそこが急に疼きだして……、それでどうしても、我慢できなくなつて……」

女騎士は泣くようにして弁解した。女の身体の中では、快感のうねりが少しずつ大きくなっている。

「ああ、ああ、私は、駄目な女だ。快楽に負けて……。でも、どうしても、我慢できないんだ……。ああ」

女騎士は快楽と恥辱に顔を歪めて懺悔した。

「もう、あれの快感を覚えてしまったんだ……。こんな私を罵るならば罵って欲しい……。でも、でも……。ああはあ」

騎士は股間への痛打にのけぞった。

シルビアに続いて、女神官も起き出してきた。ニーナは、二人の仲間の前で許しを請うように跪いて、膣が受ける刺激に身もだえしていた。

「誰も、あなたのことを罵ったりしないわ……」

魔術師は騎士のそばに近寄ると、優しく抱きしめ、そしてその唇に自分の唇を押しあて

た。

「ん、んんっ」

騎士は女騎士の熱い接吻に、抵抗するようなしぐさを見せた。だが快楽に貪欲な女の身体は異常な性愛に驚くほど柔軟に順応する。

「あんなにされて、身体が疼かないわけがない。あんなことをされて、眠れるわけがない」シルビアは、ニーナを仰向けに寝かせると、その脇に、自分も下半身を泉の中に沈めるようにして横たわった。そして、それからおもむろに騎士の茂みに手を伸ばした。魔術師は、黒い茂みの中で大きく膨れ上がる騎士の肉真珠を、包皮の上から指で刺激し始める。

「あ、あはあーっ」

女騎士は狂ったように頭を振った。

穴を責めるうなぎとクリトリスを責めるシルビアの指先。女騎士は我を忘れて牝の叫びを上げていた。

「あ、ああっ、そこっ、そこっ……」

二人の女の情交に、神官もとうとう我慢できなくなる。

「わ、私も……」

金髪の美女も、水の中に下半身を沈めて騎士の脇に横たわると、女の豊かな乳房を揉み始める。シルビアとの接吻を終えたニーナは、神官の唇を求め、サラは、それに応じて形の良い唇を、騎士のそれに押しつける。ニーナは、二人に快楽のツボをさいなまれ半狂乱となりながら、仲間達への逆襲を開始する。女騎士の右の手はシルビアの茂みに、そして、左手がサラの膨れ上がった肉褰へと滑り込む。

「んんっ」

「くううっ」

二人の女の口から鼻にかかった鳴き声が吐き出される。三つの肉の華が水の中で可憐に咲き乱れ、花卉の奥からは、透明な愛液がねっとりりと染み出してくる。

——もう、どうなっても構わない。

女達は秘事に没頭する。

牝達の膣から溢れ出る淫汁に惹かれるようにして、淫らな魚達の何匹かが動き始める。

「ああっ」

「んんーっ」

「そこ、そこ、強く揉んでーっ」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**